

## 『源氏物語』を読む

吉森佳奈子

人文社会科学研究所助教

### 近況報告

「口下手だから、人形遣いになった。」と言ったのは、文楽の吉田玉男だったと思う。仕事を考える、そういうやりかたもあるのだなと思った。わたしは「口下手なのに、教師になった」(あるいは、「口下手のくせに」)。

口下手であるということはとりあえず措くとしても、教師になったからといって突然、実力がつくわけではない。同じ欠点のまま、講義し、演習や論文指導を担当し、責任が増えるだけであるということが、今もいつも、かなり切実な恐怖だ。準備が足りずにはやばやと授業が終ってしまい、勧進帳で話し続ける度胸も、何か気が利いた雑談をする甲斐性もなく、学生にはばつの悪い笑顔を向け、痩せる思いで研究室に戻ってくる。このままずっと、思いでは痩せないことの人体実験を繰り返して定年を迎えるのだろうか。

### 『源氏物語』を読む

日本の古典作品を教室で取り上げる場合に、「日本人の心を伝える」とか、「日本の伝統文化をかいま見せる」とか、しばしば言われることを繰り返してわかった気になってしまおうとしたら、ずいぶん寒々としたことだ。そういう言説に帰着するのではなく、どのように作品に対してゆくか。

紫式部の『源氏物語』は今ほもうない。あるのは、繰り返し書写され、注されることでさまざまにかわっていった『源氏物語』である。それがどうにも気になってしまうという学生も少なくないが、わたしはこのことを、『源氏物語』を読んでゆく上で躓きになるものではないと考える。

書写のありよう、また、他に例をみないほど多くある注釈は、この作品が時代を通じて愛されたことを具体的なかたちで窺わせる。現代のわたしたちの目から見ると、明らかな誤写、また、作品理解に何故必要

なのかわからないような注が、それぞれの時代に『源氏物語』がどのように捉えられ、どんな思いがそこに託されていたかを、断片的にはあるが伝えるものとなっている。

書かれたものと思われたものとは、書かれたものしか後の時代に伝えられないが、書かれなかった思いを知るひとつの手がかりとしてこのようなものはあり、書誌、注釈はそのようなものに耳をすます学としてもあるのではないかと考える。

#### 例：准太上天皇光源氏

しかし教室で、時処を隔てた出会い、などと言ったところで、胡散臭いばかりであろう。実際にどのように手を動かし、考えてゆくかという実証の問題になってゆかなければならない。

『源氏物語』藤裏葉巻、光源氏は准太上天皇となる。即位することなく、位を退いた帝＝太上天皇に准ずる位地を得たのである。史上に准太上天皇の先例はなく、『源氏物語』の中で光源氏の栄華の頂点と言われる。

史上に先例がない、ということは、現代のわたしたちが『源氏物語』を読む場合に、特に躓きとはならない。物語の中の出来事だから、ということで納得し、先に進むことができる。

そのことを訝しみ、ここで立ちどまるのは中世の注釈書類である。特に史上の例と

いうことにこだわりぬくのが、南北朝の注釈書『河海抄』である。

先例はないので、草壁皇子追号長岡天皇〔天武第二子文武父〕…のように、追号例を引いてまで、史上の例を挙げようとする。

その列举の中に、小一条院〔敦明三條院御子〕寛仁元年八月廿五日院号〔号小一条院〕のように、ただ一例追号例でないものが見られる。小一条院（敦明親王）が生前に、踐祚なしに院となったことは光源氏の場合と類似するが、「寛仁元年」とあるように、これは『源氏物語』以後の出来事である。

この場面に限らず、『河海抄』は『源氏物語』以後の史実を例として挙げる場合があるが、それは現代のわたしたちから見ると、何故、後の時代の史実をこの作品の理解に反映させなければならないのかと思われ、不可解な注である。

しかし現実には、平安末から中世にかけての時期、『源氏物語』があたかも史上の先例であるかのように機能していたことが、平家時代の記録類等から窺われる。そうした、物語を先例化、史実化するような感覚の延長線上に、この注釈書はある。

そのような『河海抄』によってあらわし出されてくる『源氏物語』は、わたしたちのそれとは異なるものとしてある。古典作

品を読む場合、現代との差異の確認に終始してしまっただけではないが、数行の注の実証的な考察を通して、思いもよらない作品のありようを見ることが出来る窓のような場所が、『源氏物語』が愛されてきた時間の中にはある。

おわりに

注釈書等、現在まで伝えられているものを通して『源氏物語』を見てゆくとき、決して会うことのない人の触れたものに触れてのひらの跡が重ねあわせられるような気がする。それはわたしにとって、ずいぶん楽しいことなのだが、それをそのまま伝えるにはどうしたらよいのか。先の光源氏の准太上天皇の例で言うと、『河海抄』の注がどこからきたのかを、同時代の歴史記述等の一つ一つ見、明らかにしようと試みることを実際に教室で話すと、たぶん、「ずいぶん楽しい」どころか、「ずいぶん退屈」になってしまっていると思う。

また、何かを考え、何かを見つけようとし、見つけられるととても嬉しい、というようなことを、嬉しい思いを色褪せさせずに、講義としてどのように表現したらよいのか。

そんなことを思っているうちにほんとうに、十年、二十年はすぐになっちゃうのかもしれない。

(よしもり かなこ/日本文学)